詩人ロバート・バーンズの虚像と実像と

（骨相学上の，また医学心理学上の，問題をめぐつて）

——その生誕二百二十年に当って，この一篇を捧ぐ——

富　田　光　行

1959年は英国の詩人ロバート・バーンズ（Robert Burns）の誕生二百年に当るので，英国はもとより世界各国で，彼を追慕私淑する人々によって，種々なる祝祭の行事が展開された。その中でも，彼の最終住居の地となったダムフリース(Dumfries：イングランドとスコットランドとの境辺に横わる市）では熱誠あふれるカラフルな祝賀が執行された。その前年（1958年）12月に，市長G．J．McDowall 閣下から招待を忝ういたしてあった私は事態意の如くならぬので，祝賀のメッセージを翌けて1月8日附で発送し，衷心から祝意を表したのであるが全市は同月25日の誕生日を中心として，前後一週間に餘る日々を，詩人の追憶・讃美・冥福に，夜を日についで，語り，歌い，祈りつつ，過すのであった。

これらの状景を一々眼前に髣髴せしむるように，当市の新聞 Dumfries and Galloway Standard は大小もらさず詳細に掲載し，遠近参加出来ない人々にも十分な満足を与えてくれるのであったが，不肖私の謹呈した祝賀のメッセージもデカデカに紙面をふさぐという風で，甚だ恐縮感謝した次第であるが，この新聞による記事並びに写真は，それから二十年を過ぎた今日，読む者，見る者に対し，いよいよ文献的にまで価値を発揮するようになって来ていて，私も市長閣下から直送された分を保存して，現在に至っているが，まことに得難い賜物として，感謝感激，わが家の家宝にもなることと確信秘蔵している次第である。

私が筆頭に掲げたような表題の下に，ささやかな稿を寄せるのは，詩人バーンズについて，少くとも日本では，私の知り且つ聞き，読んだものの中で，あまり語り述べられてはいない点，いわば外面的なもの—骨相学的なもの・外科医学的なものと内面的なもの—内科医的なもの・心理医学的なものとなる人間映像の虚々実々を・彼の死後寄せられた資料によって明かにし，詩人の身心に関する疑問に答え，延いては，その人間性を浮き彫りにして，彼の面目を回復高揚したいと思うためである。

このことのために，参考としたものは，古くは Life and Works of Burns〔ed. by Robert Chambers: 4vols. 1320pp. in all〕と新しくは Robert Burns〔by Maurice Lindsay：291 pp.〕で，前者は1851年に出版されたものであるが，驚くばかりに詳細を極めて居り，詩人の生活，思想，またその周辺を取り巻く事情が手に取るように窺える，また後者はバーンズの死後，その毀誉褒貶をくぐり抜いて来たバーンズの研究に新なる方向を開く意欲的なもので，示唆に富み，詩人の誕生二百年祭を目指して出版されたものである。尚，このほかに，かの新聞 Dumfries and Galloway Standard にも負うていることは勿論である。これらが私の出版途上にある拙著 Robert Burns:His Life and Thoughts の論述には有力な資料の一端となっているもので，ここに再び問題箇所の参考とする訳である。

外面的なもの
——骨相学的なもの，外科医学的なもの——

バーンズは身長が凡そ5フィート・10インチで，勢力と軽快とを示す体格であった。彼の黒いカールされた頭髪で掩われている広い額は多面的な能力を物語っていた。彼の眼は大きく漆黒（coal-black）で，熱情と知性とにみちていた。さればこそ，少年ウォルター・スコット（Sir Walter Scott）をして，かく唸らせてしまった。——I never saw such another eye in a human head,though I have seen the most distinguished men of my time. と。彼の着こなし——それは，しばしば，だらしないことがあったけれども——や彼の前職を物語る肥満の撫肩やは容姿の自然な均斉と優雅とを装っていた。その風彩は低俗を脱して，非凡なまでに人の興味を惹きつけ，意味あり気（expressive）なものであった。

バーンズの外見は彼のもつ心情の性格を最も著しく表明しているのであった。然し，初めて見た場合に，彼の骨相は或る粗野な空気をかもしだすが，そこには物事を深く洞察する力や静かに思考する力やが混ぜ表わされて，そしてそれから憂愁へと近づく何物かがあった。

彼が打ち出す最初の態度や挨拶やには，心の「完全なゆとり」（perfect ease）や「落ち着き」（self-possesion）やがあったけれども，事実上は「大らかさ」（openess）と「愛想のよさ」（affability）とが両立しないところの厳くてまた殆ど尊大にも近い品位が見られ，それは秀でた才能を意識する心根を物語っている。〔詩を作ることが出来て，自分らの注目が一つの名誉であるエールシャア（Arysh-ire）の一農夫（私註・ロバート・バーンズその人）に自分らが近づいているのだと想像する初対面の人々は自分らに一つの威厳をおび，しゃばりをたしなめることや押し付けましいことを追い払うことやの特別な威力をもっている人（私註・ロバート・バーンズその人）がそこに居ることによって，すぐさま威圧されるのに気がつい た。然し，自分自身に帰する尊敬を失わぬように用心はするのたけれども，それがよろこんで払われることの判る所にそれを決して押売はしないバーンズであった。そして，また誇らしげに接近して行くことを避けはしなかったけれども，彼は親切とか慈善とかの要素に対しては何時も開放的で無制限であった。彼の暗い横柄な風彩はすぐにほぐれて，善意・憐憫・温情・等々にみちた格好になってしまうのであった。そして，彼の種々なる情緒が彼の心中に相次いで起ってくると同じように，すぐ最も幅広い ユーモア が最も法外な陽気か最も奥深い憂愁か又は最も気高い情緒かがほのみえて来るのであった。

詩人ロバート・バーンズの塑像

彼の音調（tone）は彼の容貌による表情とまた彼の心情とに対して適切に呼応した。これらの天禀に，敏捷にして明晰なる理解力とか非常に強大な分別力とかが加えられる時，彼の対話に於ける魅力——彼の社交的な会合に於て，彼がその周辺にいる人々すべてに及すやに見えるところの——を我々は説明することが出来るであろう。女性達のいるところでは，この魅力が更に一層明白に見えるのであった。彼女らがそこにいるということが彼の心中深く眠る憂愁の悪鬼を魅了させ，彼の最も幸福な感情を覚醒さ

せるのであった。それは彼の心情（heart）の脆さをと同じように彼の幻想の強さを刺戟したのである。そして，その言語に於ける激烈さや豊富さやを抑制することによって，彼の態度に，男性達が居るところでは，彼らがめったに持っていないところの風趣（taste）や優雅（elegance）やさへもの印象を与えることが時々あったのである。この感化影響は言うまでもなく相互的（reciprocal）なものであった。最も優秀な社交に慣れているスコットランドの淑女（私註：Mrs Walter Riddel その人）でさえも—特徴のある素朴（naïveté）さをもって宣言したところによれば——如何なる人物との対話も，バーンズのそれほどに完璧に彼女を恍惚させてしまう（carry her of her feet）ものはなかった。〔この淑女は驚く勿れ，ゴルドン伯爵夫人（Duchess Jane Maxwell Gordon）その人であった。〕

さて，然し，物には表もあれば裏もあり，その見地・所懐は十人十色であろう。ここで，実はバーンズについて，彼と交友のあった Dr. James Currie（1756—1805）による伝記があり，これが相当に有力な資料と見られ権威と考えられ，版を重ねること八回，延長20年にわたったのである。

Dr. Currie は1756年5月31日に，Dumfriesshire の Kirkpatrick Fleming で，牧師の子として生れた。ダムフリースで学校教育を受け，1771年に Virginia へ移民し，James 川のほとりで，商人として身を固めた。その後，彼は風土熱と多くの挫折とに苦しみ，1776年に Greenock に向って航海したが，これは Edinburgh で医学を研究し，アメリカでそれを開業しようと企てたからである。然し，出帆後三日にして，その船は例の革命者達によって拿捕され，彼は捕虜の身となり，植民軍で服役をさせられることになった。その後，彼は解放され，再び出帆したが，このたびも亦捕虜の身となった。そこで，また解放さるべく，彼はボートに乗って150哩を走らねばならなかった。病気とその他の不幸が次から次へと彼を試錬したのである。然し，彼はついに1777年5月2日に，Deptford（旧名 West Greenwich）に到着した。そして，彼はエヂンバラ大学に入り，1780年に卒業し，10ケ月の後，Liverpool で身を固めた。

1792年に，彼は Dumfriesshire に一つの小さな土地を買い受け，そしてその頃，彼はダムフリースでバーンズに会ったのである。バーンズの死後，Dr. Currie は彼の詩を称讃する一人として，その作品を編輯するようにと選出された。〔それは，彼が医学に貢献する書物は幾多出版しているので，その手腕を買われたためもあろう。〕Dr. Currie 自身はそういう仕事に向いていなかった。然し，いよいよその仕事を始めるとなると，四方八方に手を回し，「あること・ないこと」まことに詳細を極め，読む人をして，とにかく一応敬服感嘆，時の過ぎるのも知らずに，幾多の物事が眼前に髣髴たらしめられるのであったほどだから，それはその後，一世紀以上にも亘って，御説御尤な権威の資料となるのであった。即ち，その四巻からなる版行は1800年に始められ，一セット1ポンド・11ペンス・6シリングで売れた。出版数2000部。第二版は1801年，第三版は1802年，第四版は1803年，そして1820年に，ロンドンの Cadell and Davisによって，第八版が世に送り出された。

然しながら，彼を擁護する側に廻ると，その当時この仕事を本当に引き受けることが出来るか又はその意志があるかのように見えるものは他には一人もいなかったし，また彼はバーンズの死後，取り敢えず，その遺族を援助するための資金を作るのに，これが最適な仕事と考えたのであると言わねばならない。尚，第八版が刊行された時にも，バーンズの弟 Gilbert Burns（1760—1827）は Dr. Currie の正否を論難しないように，そして兄の名声を弁護する機会を他日に持つようにと，出版者達に警告される場面もあったほどである。

さて，Dr. Currie が直接間接に入手した資料は実に夥いものであるが，その功罪も数え上げれは，これまで論じつくし難きに及ぶが，我々はここで，一応彼がバーンズについて，書き綴る物事で，「そうだったのか，それは驚くなあ。」と思しきこと—詩人バーンズの「そうでなくて，くれればいいのだが」，つまり虚像に変る一応は実像として伝えられている重大問題を取り上げることにしよう。

「友情の詩人」と称へられるバーンズが社交的な人間で，その性格が彼をして，友と酒杯を交は

し，祖国の名産スコッチを讃へ，特にダムフリース定住の時代になると，同市の酒場 Globe Inn には足繁く通っていたことは事実で，何人も否定はしない。ところが，この酒を嗜むという事実でバーンズの死因はアルコールによるとの結論に到達したのが Dr. Currie であった。彼は言う—「あれやこれやと，形こそ様々ではあるが，絶えずアルコールによって刺戟され……物思う瞬間瞬間に，彼はその進行を止めるのに或いは緩めるのに必要な知性（mind）の力を失い，わが早めつつある終末をハッキリ予見しつつ，わが運命的な前進を最も深き悔恨の念をもって反省するのであった。彼の気分は次第に苟立ち隠欝となり，われ自らを脱して社交場裡，しかも屢々最低な種類のそれに逃避して行くことがあった。そして，そのような人中では，酒が感受性（sensibility）を増進させ慈善心を刺戟させるところの陽気な感官部分は制御され得ない熱情が一般に支配して，それに続くところの部分へ，そこそこに到達してしまうのであった。酩酊の汚染を受ける人はどうして他の汚染から逃れ得ようか。然し，気兼（delicacy）と人情（humanity）とがそのベールを覆う誤謬についての記載は，これを差し控えることにしよう。」さらに，Dr. Currie によると，前述の如くに，酩酊による汚染は更に他の汚染をも来し，バーンズはついに性病（V. D.＝Venereal disease）に罹って死んだのだということになっている。

理想と現実と，作品と人物とは，往々にして一致しないのが経験の示すところである。我らの詩人バーンズについても，Dr. Currie の語り伝えるところ，それが真相であるならば，止むを得ない。それはバーンズ自らが負うべき烙印であり，あの寒村 Alloway に呱々の声をあげ，斯くして斯くなり，遂に斯くなり果てた憐れむべき運命の投影でもあった。

バーンズも血肉をもった一個の人間であった。してみれば，彼には多くの友があったと同じように，また若干の敵もあったであろう。それ故に，Dr. Currie の膨大詳細なバーンズ伝を突き付けられて，片や撫然と失望する一群があるかと見れば，片や欣然と跳躍する一群も見られたのである。かくして，1820年までには，先述の如くに，Dr. Currie の作品は七版を重ね，そして，出版者達は第八版を用意すべく，二枚の小切手——それぞれ250ポンド——を詩人の弟 Gilbert Burns に申出した。然し，誠実で，熱心で，働き者で，臆病で，また気の廻らない（dull）Gilbert ではあったので，わが死せる兄の名声を弁護することによりも，むしろ Dr. Currie の関係を憤激させないことに一層の関心があった。尚，彼は兄の習癖に関する補充にさえも，その真相を打ち明け語ることに失敗し，またその出版は売れないだろうという理由で，二回目の小切手はこれを受取ることにも失敗した。

火のない所に煙は起たぬとは，よく聞かれる人間経験の至言である。然し，その火は何時まで燃えるというか。また，それは真実の火であるというのか。

1834年（バーンズの死後，38年）の3月，その妻 Jean Amour（1767—1834）も，物には貧しく事には繁き詩人を夫に持ったが故に，殊更に多岐多難，波瀾曲折の人生行路を静かに歩み果てて死んだ，彼女の土葬をするため，霊廟の入口で，その最近親者達の賛同を得て，ダムフリースの市民達若干名によって，墓地から詩人の頭蓋骨を持ち上げ，そしてそれから顔形（cast）を鋳造することに決まった。これはその特別な発達に関して，骨相学の研究者達によって，恐らく感ぜられるであろう興味を満足せんとする見地によるものであった。この目的は3月31日と4月1日との夜間に実施された。それで，その時そこに居合せた外科医の Mr. A. Blacklock によって作成された説明は次の如くである：——

> それら頭蓋骨（cranial bones）は，もし我々がそれらの外部的な骨板（table）の腐食を少々除外すれば，すべての点で完全であって，それらの縫目（suture）によって，しっかりと結び合わされていた。眼窩の繊弱な骨さえも，左の方にある os unguis（bone of nail）は僅か例外を除いて，完全であり，その死と墓石とによって，も無疵であった。
>
> 顎の骨もまたそのまま dentes sapientiae（wisdom teeth 親知らず歯）を含めて，全部班点とか瑕疵とかもなく，両側に4本の奥歯を保有しているのであった。門歯（incisore），

犬歯（cuspidate），その他は全部恐らく最近顎から脱落してしまっていた。顔と口蓋との骨も全部完全であった。黒髪の或る僅かな部分は極めて僅かな白髪が混じっていることが，その後頭部（occiput）から或る無関係な物体を分離している間に，観察された。

実に，我々がバーンズの頭蓋骨を発見して保存の高い状態にまさるか又は骨相学者達によって，かくも長い間願望されていたところの物事を供給するという，これ以上に明白（fair）な機会——我々の不滅な詩人の頭顔（head）に関する正確な原型（model）を提供し得るものは何物もなかった。また，このことを最も正確にして満足な方法に於て達成するために，砂の一粒々々，またそれと無関係な外部の身体が注意深く洗い落され，そしてパリーの石膏が或る経験を積んだ美術家の手練と正確とのすべてをつくして使用されたのである。その塑像がみごとに取られ，この故に骨相学者達やその他の者達に対して，甚だ興味深いものとなるには事欠かないまでになった。

我々の目的を達成したので，頭蓋骨は鉛製の箱へ安全に納められ，我々がそれを発見した正にその場所の大地に委ねられたのである。〔Archd. Blacklock 報〕

頭蓋骨からの塑像がエヂンバラの骨相学協会〔Phrenological Society of Edinburgh〕に送附され，バーンズの大脳発達に関する次の所見(この小論では省略する)が Mr. George Combe によって作成され，頭蓋骨に関する4箇の所見との関係に於て，発表された。〔W. and A. K. Johnston, Edinburgh 報〕

内面的なもの

——内科医学的なもの，心理医学的なもの——

さて，このような前代稀なる所置によって獲得された結果がバーンズの映像に，またそれに係る Dr. Currie による伝記に，如何なる証左如何なる弁明を可能ならしめることが出来たか。我々は今から厳正なる骨相学による内科医学的・心理医学的な判定に耳を傾けることにしよう。

頭蓋骨の鋳型というものは個人の気質（temperament）を示すものではないが，バーンズの肖像は胆汁質で神経質な気質や体力（strength）と活気（activity）との源流やまた敏感性（susceptibility）やを表わしている。そして，彼の「にこやか」（beaming）で精力的な眼に関する同じ時代の人々によって与えられた説明や彼の表明に於ける敏速さと激烈さとやは彼の脳髄が積極的，多感的であったという推論を確立する。

脳髄の寸法というものは，他の条件も同じてあるが，心理的能力の測定となるのである。バーンズの頭蓋骨は膨大な脳髄を表わしている。その長さは8インチ，その最大な横幅は6インチ，その周囲は$22\frac{1}{4}$インチであった。これらの測定値は，外皮を含めて，スコットランドの生存者達が持つ頭の平均値を凌駕して居り，そのために1インチの8分の1が斟酌されてもよいのである。それ故に，バーンズの脳髄は体力（power）と活力（activity）との二要素を持っていた。

動物的な性癖（propensities）を示すところの脳髄の部分は非凡に広大で強烈な激情（passions）またそれら passions の下に活動する（in action）偉大なエネルギーを表している。家庭的な愛情（domestic affection），色欲（amativeness），子供好（philoprogenitiveness），粘着性（adhesiveness），等を表す諸器官のグループは大である。philorogentiveness（子供好）は男の頭としては非凡に大である。好戦性（combativeness）と破壊性（destructiveness）との器官は大きくて，短気（temper），我慢出来ないこと（impatiency），そして「いらいらすること」（irritation）に陥り易いことの異常な激烈を表している（bespeaking）。「隠しだてをすること」（secretiveness）と「用心深いこと」（cautiousness）とは共に多量で，またそれは彼が抑制を必要であると感ずるところでは，可成の抑制力を与えるだろうことであった。

「物を欲がること」（acquisitiveness）と「うぬぼれ」（selfesteem）と「ゆずることが好きであること」（love of approbation）とも，また十分に天より与えられている。然し，acquisitiveness は他の二つより劣っている。これらの感情(feelings)によって，財産欲や自尊心や他人を尊重したい心やが与えられる。第一の特質は第二と第三とのそれらほどに，バーンズではすぐに関係がない，何故ならば，それら（第二と第三と）の方は実際には

第一よりずっと強いからである。

道義感（moral sentiments）の器官もまた大いに発達している。観念性（ideality），驚異（wonder），模倣（imitation），慈悲心（benevolence）はサイズが最大である。尊敬心（veneration）もまた大である。「良心的であること」（conscientiousness），不動心（firmness），希望（hope）は充満している。認識器官（knowing organ），つまり「知覚する知性の器官」（organs of perceptive intellect）は大である。そして，また反射作用（reflection）の器官も可成であるが，前者よりは劣っている。作因力（causality）は比較力（comparison）より大きいが，機知（wit）は両者よりは劣っている。

さて，ところで非常に大きい慈悲心と大きな観念性とが，その非常に大きな子供好きなことと粘着性とに，結合されて，我々はバーンズがしばしばその生涯に於て最悪なる舞台に立っている時にすら，示したあの極めて美しい柔和（exquisite tenderness）と洗練との要素を，そこに見出すのである。その結合は，そのまま，情緒（emotion）——偉大な善なり偉大な悪なりを容れ得る——を極端に満足させがちで，また断えず平坦で前向きな実践道徳（practical morality）で取り囲まれている心を物語っている。

偉大な闘争心と破壊心と自尊心との結合に於ては，Scots wha hae wi' Wallace bled（ワラスと共に血をば流せるスコットランド人）やそれと同じような作品やに霊感を及ぼした根本的な特質を我々は見出すのである。大きな「隠しだてをすること」と模倣と知覚器官との結合は彼の劇的な天稟とヒューモアの要素とを与えている。頭蓋骨はヒューモアに決定的（decided）な才能を示しているが，然し機知に対する才能が少ないことは既に述べた。一般人はこれらの才能を機知とヒューモアとに混同させがちであるが，然し形而上学者達はそれらを区別しているし，またそれらの骨相学上の作品に於て，それらの様々な要素を指摘もしている。バーンズは諷刺に対する才能はもっていた。破壊心がヒューモアを与えるところの結合に加えられると，諷刺を生み出すのである。

下手な観察者はその額を見て，それが平均の大きさであると思うかも知れないが，然し前方の丸い突出部（anterior lobe）の寸法が長さと広さと両方に於て，注意されるとき，知的器官（intellectual organs）は大きかったことを認められるであろう。前方の丸い突出部は非常に多く突出しているので，実際には，そうでない額に，狭小であるような外観を与えている。このような大きさをもった前方の丸い突出部は偉大な知的能力を示している。大きな注意集中力（concentrativeness）を伴う知覚反省の器官（作因力がすぐれている）と大きな感情器官との結合はバーンズが傑出していたあの聡明と鋭敏な常識とを与えるのである。それで，頭骸骨は作因にまさるところに高く聳え，そして観念性の領域に於て，広く延伸していて，また彼の道徳感覚の力はその領域に横わっていた。大きな用心深さを伴う動物的な性格の大きな器官と唯充満しているに過ぎない希望との結合は，彼が置かれた不利な環境と相俟って，彼がかくもしばしば悩まされた憂鬱にして内面的な不幸を証明している。この憂鬱は不健康によって，尚一層深くさせられるのであった。

「物を欲しがること」と「用心深いこと」と「認られることが好きなこと」と「良心的であること」との結合は金銭上の独立に関する彼の鋭敏な感情の源流である。動物的な性癖に於けるこの偉大な能力は浪費に対する強い誘惑を彼に与えることがよくあった。然し，今述べたばかりの結合は或る有力な抑制を彼に課することがよくあった。その脳髄は一つの実利的（economical）な性格の要素を示していて，このことは彼がその零細な給料にも拘らず，借金をしないで死んだということで知られている。

凡そ，観相学者で，この頭を観察し，バーンズが置かれた環境を熟考するならば，必ずや，生々とした哀惜の感を抱くようになる。バーンズは彼が置かれた身分の仲間達には大いに優っているぞという意識——彼が到達し得るところのそれより遙か以上に高い領域を目指す力があるぞという——と彼が辛じて抑制することが出来るのだが，而もそれに耽溺することが命取りとなるところの熱情を持っているのだという意識を抱いて，大地を歩いたにちがいない。もし，彼が幼年時代からもっと高い生活階級に置かれ，自由に教育され，そして彼の能力に相当した職業に就いていた

ならば，彼の性格（nature）に於ける低劣な部分（inferior portion）はその勢力（power）の一部を失っていたであろうし，その間また彼のよりよい資質（qualities）は決定的にして恒久的な優秀性（superiority）を身に着けたであろうに。」「バーンズの頭蓋骨に関するものと念を入れた解説（note）が Mr Robert Cox の筆になる Phrenological Journal, No XLI に現われた。この紳士はバーンズの性格（character）が「物を欲しがること」の充分な発展にしたがっているのだということを示そうと努力し，「彼自身（バーンズ）の説明によれば，彼は金銭を作ることや，況やそれを蓄えることやの技倆（art）を殆どもっていない人物であった」とも言っている。金銭を作ることに於ける彼の技倆が程々に十分であったということには疑問がない。何故ならば，彼は彼のたましいが忌みきらう職業にあって，そして彼の最も骨の折れる文学上に於ける業蹟の幾個かに対する金銭上の報酬を受け取ることを彼の尊厳が許さぬことと考えたからである。然しながら，彼は金銭の価値に対して，決して無感覚ではなかったし，また決してそれを投げ捨てはしなかった。それどころか，彼は「物を欲しがること」より以上に強い感情――つまり，慈悲心・執着心・また賛同心の如き斯様なものが働き出す時を除いては，著しく質素倹約（frugal）であった。彼の収入が7ポンド以上ではなかったところの Mossgiel に於ける居住中，彼の出費は弟 Gilbert が伝える如くに，如何なる年に於ても，彼の乏しい収入を超過することは決してなかった。彼が借財を1シリングも残さなかったこともよく知られている。彼の世帯（household）は Ellisland に於てではなくして，この Mossgiel に於けるように，彼は出費に本人自ら管理統制を出来る範囲で実行することにしていたと，確かな筋から，私は知っている。彼の死後，家族の出費が彼の在世中より多かったとも，私は聞いている。」。

「これらの事実はすべて「物を欲しがること」の相当な発達と両立しているのである。何故ならば，その器官が小さい場合には，独立を愛することと恩恵を求めることを嫌うこととがたとい強くあっても，金銭上の利害関係については習慣的な油断（habitual inattention）があるからである。バーンズが時折自分自身にもとづくものとしているところの金銭についての無関心はそれ故に affectation（見せかけ，気取り）の気味――彼が賛同（approbation）と「隠し立てをすること」（secretiveness）とを愛することに誘導される失敗の気味がしばしばあるように見える。実は，Miss Charles に宛てた手紙の一つで，彼は裕福になりたいという希望を明かにほのめかしている。」〔この小論全篇はかのエールシァーなる弾唱詩人（bard）の性格（character）に関心をもつ万人によって精読される価値が大いにある。〕

さて，Dr. Currie によって綴り伝えられ，これを信ずるものある故に，前後八版の長き星霜に亙って，広く読まれ，その間に面目丸つぶれの詩人を何とかして，その虚像から実像へと取り戻さねばならぬと考える人々が次から次へと現われるのであった。骨相学による証左は証左であっても，尚まだ釈然としない部分も残っているであろう。37年という短い詩人の，それより更に短い日々のダムフリースに於ける詩人の習慣とか行状とかが多大な論争の的（subject）となっている。それで，この問題に於ける二つの非常に決定的な見解が取られているのである。

Dr. Currie によれば，ダムフリースに於けるバーンズのは放蕩の生活だったと聞く。細大もらさず書き記してあるぞと読める全四巻による主張は，すでに我々が読んだように，「あれやこれやと，形こそ様々ではあるが，絶えずアルコールによって刺戟され……物思う瞬間瞬間に，彼はその進行を止めるのに或いは緩めるのに必要な知性（mind）の力を失い，わが早めつつある終末をハッキリと予見しつつ，わが運命的な前進を最も深き悔恨の念をもって反省するのであった。……酩酊の汚染を受ける人はどうして他の汚染から逃れ得ようか。……」と弁舌論理あざやかに書きまくり，果ては，性病をもって，その死因とまで暗示するに至った。それにつづいて，エヂンバラの各種新聞に於て，最も尊敬されている新聞にさえも，出されているバーンズの死に関する短評（notice）は次のようになっている：――

その娯楽（amusement）に彼がかくも大いに貢献しているところの大衆は，残念なこと

にも，彼の非常な才能（endowments）がそれら（非常な才能）をして，彼自身にも彼の家族にも無益なものにさせてしまったところの弱点に附き纏はれていたということを知るであろう。と。

詩人に関する最初の伝記（memoir）を書いた Heron は言う：——

ダムフリースに於て，彼の放蕩は尚一層と習慣的になった（即ち，それが田舎に於てよりも……町の道徳(moral)は少からず退廃され，そしてまた，夫でありまた父であるのに，バーンズは私が言うをさえ控えるような態度（manner）で，普通（general）な汚染（contamination）による苦痛（suffering）から脱しなかった。と。

これらに対しては，ダムフリースに於けるこの期間中に見られたバーンズの行状（conduct）に味方して，強い抗議証言が彼の上司 Mr. Alexander Findlater によって発せられたし，また詩人の息子達にとって小学校の先生であった James Gray 師によっても亦然りであった。Mr. Findlater は言う：——

ロバート　バーンズと私との結び附きはこの間接税務局に彼が入った直後に始まり，そして彼の臨終に至るまで続いた。その間ずっと，税務官吏としての行動（behaviour）に関する指揮管理（superintendence）は私の特別な職分の一部であって，それにまた彼の同郷人達（countrymen）によって，かくも有名となっている一個の人間であり，一個の詩人であるものに共通な行状に関する怠慢な観察者で私はなかったと思われてもよいのだ。

前者の能力（capacity）に於ては，その注意力が彼は模範的であって，またその不審番に当っては，最小の非難さえもされまいと用心していた。……その死ぬ日近くなって初めて，この点について，幾分遠のくことがあった。そして，これは病気と積り積った諸病の圧迫ということによるのだと充分に説明された。と。

彼が Ellisland に住んでいる間もしばしばであったが，況やダムフリースに移った後には一層そうであったのだが，仕事の時間中には全くいつも通りで変っていることがなく，事務に於ける本分を遂行することが出来たし，また単独で飲酒することは知られてさえ居らず，また午前中にアルコール飲料の使用に耽けるのを私は見たことがなかったと私は公言する。

彼が好きな二三の友人達と晩に着席しているとき，思慮分別が指令するところの境界線を越えた所まで社交時間を延長する傾向があったということは勿論である。然し，彼の家庭では，彼が高い程度に注意深く愛情ある以外の何者にも決して見られなかったと私は敢えて言おう。

Mr. Gray の証言も亦それと同じ目的である。彼はバーンズとその晩年に親しかった。そういう訳で，しばしば彼に会った。Mr. Gray は言う——

彼が時折，彼には相応はしくない社会に混じることがあったのは否定さるべくもない。彼は社交的で陽気な人間であった。彼は彼の対話に於ける魅惑的な力のため，あらゆる階級の男達によって招待された。然し，その社交的な場合を制止出来ない熱情が支配するということは決してなかった。バーンズは酩酊するということが滅多になかった。酩酊者というものは，すぐ「たわいなく」(besotted) なり，そしてその浮かれた相手によってさえもよけられてしまうものである。もし彼がそんな人間であったならば，彼はそんなに長い間，すべての関係者（party）に対する敬愛の的として留まることが出来なかったであろう。如何なる身分の親によっても凌駕されるのを私は一度も見たことのない程度の配慮を以て，彼が自分の子供達に関する教育を管理したということが，職業上私自身の見るところとなった。彼の家庭内で，彼は非凡な少年である長男の勉強を指導するのに楽しい幾時間も過すのであった。

我々は彼が当時9才以上にはなっていないこの若者に，Shakespeare から Gray までの英国詩人達を説明するとか又は我々の最も有名な英国史家達のページ中に，彼ら（バーンズと長男と）が住んでいるので，英雄的な美徳（heroic virtue）の実例をもって，彼（長

男）の心に蓄積しているのを見ることがしばしばあった。もしも，これらのような仕事が習慣的な酩酊と両立するのかどうかを普通の公平（common candour）な人には誰にでも聴いてみたい位である。

詩人の妻 Jean Armour は彼（バーンズ）の弁護者中，最も熱心な者の一人であった。結婚の平和に深く関する幾つかの点で，バーンズの常軌を逸することが何であっても，彼の「人好きのする」(amiable) 相手は彼を非難しなかった。彼が彼自身で表現しておいた後悔（penitence）と彼女自身に対する彼の行状（conduct）の不変な「情にもろいこと」(tenderness)とがその方面に於けるあらゆる非難から彼を救ってしまっていた。彼女は夫の飲酒癖（convivial habits）なるものは，情報によって甚だ誇張されたようなものとして，つねに説明していた。彼女は彼が夜中にアルコールで，そんなにひどく当てられて，帰宅するのを一度も見たことがなく，彼はいつものように，自分の家は無事であるということや，手を借りなくて自分自身の着物をぬぐことが出来たと断言していた。

このような相容れない，すべての証言から起って来るところの混乱事態を Gilbert Burns（バーンズの弟：1760—1827）による処置が来すところ少くない。Dr. Currie による伝記（memoir）が発表された時，Gilbert はその伝記をもって自分が満足し切っていると言ってしまったし，またバーンズの習慣に関して，その伝記が確実にしてしまっている承認事実（admission）に対して，抗議を口に出すことを数年間はしていなかった。

1816年（当年56才）になって，Gilbert はDr. Currie が書いておいた不当な又は誇張された光景に対するバーンズの弁護に立ち入ろうとの意図を宣言した。そして，この宣言が故 Dr. Currie の友人として，Mr. Roscoe から幾分か憤慨した警告を受けた時，彼は若干年間兄には殆ど会ったことがなく，従って，またダムフリースに於ける彼の習慣については殆ど知っていないので，Dr. Currie が陳述しておいた物事を反駁して何も言ふことが出来なかったと申すことによって，彼の行状に関する明かな一貫性を説明するのであった。然し，今や Mr. Findlater と Mr. Gray との証言からして，詩人が誤り伝えられていることを知って，彼はこの伝記記者（Dr. Currie）の思い出に対して，あらゆる有難い敬服をしながらも，兄に関する自分の思い出を支持(疑惑を晴すこと)〔vindicate〕することが自分の任務であると感じたのである。彼はこの責任感にもとづいて，1820年に詩人の作品を編輯して，その中で，Dr. Currie によって，Robert Burns の名に打ち附けられていた烙印をそれから取り除くのに充分なものとして，Mr. Findlater と Mr. Gray との書翰を発表したのである。

これと同じように弁護的な音調が後につづく様々な著者達によって取られ，しかも Prof. Wilson によってより以上に大きな言語力をもった何人によってもなされることはなかった。博士は Land of Burns (1840年版）に，Essay on the Genius and Character of Burns を掲げている。

バーンズの死後。二週間以上にならず，Mrs. Waler Riddel は匿名で，Dumfries Journal へ彼に関して，すでに流布し始めているところの誤伝（mispresentation）と誹謗（calumny）とを挫折する意図の下に，彼の個人的な資質に関する所見を発表した。「バーンズのすべてを知っているとまで言えそうな」彼女による短評（notice）は同夫人の「知性」（intellect）にというよりは，むしろその「心情」(heart) に対して，一層の信頼をおけるものでさえある。何故ならば，それを書くに先立って，彼女はバーンズが彼女と彼女の夫とに対して投げたことのあるそれらすべての不当な諷刺詩（lampoons）をその場に於ける激怒の下に赦さねばならなかったからである。我々はバーンズを尊敬するこの夫人による報道処理（conduct）を全面的に彼の有利な牢固たる証言と考えねばならない。

バーンズは彼女より以上に神聖であった多くのものに対してと同じように，彼女に対して罪を犯したことがあった。然し，彼女はそれにも拘らず，彼のもつ多くの功績や長所やを認め，そして純精な知性（mind）が慈悲をもってしては見れない罪科（offences)——実際にはあったのだが——を彼の中に見出すことをしなかった。〔その「不当な」

(unhappy) 諷刺詩については，後に掲げることにしよう。]

Mr. Alexander Smellie はバーンズが死ぬ二三ケ月前に，Mrs. Walter Riddell を訪問しているが，その時に彼は彼女がバーンズのことを非難の言葉で話しているのを聞いたのであるが，彼女自身に対するバーンズの行状によって，彼女は恐らくこの上なく十分に弁明していたことであろう。Mr. Smellie は詩人の死後直ちに彼女を再び訪問しているが，すべての攻撃は称讃と後悔との中に消されてしまっているのに気がついた。彼女の若い友人に附き添はれて，この熱心な淑女はその夜おそくに St. Michael 教会の墓地へ行き，そして詩人の新しく造られた墓の上に月桂樹を置いた。

これら人々の他に，尚 Alexander Peterkin (1780—1846) によって，1815年にバーンズの節酒 (sobriety) に関する証言を発表することによって，Dr. Currie の誤伝を訂正しようとの或る企てをしたことも附記せねばならないであろう。

Dr. Robert Chambers は1796年1月に詩人の不意を明かに打ったし，また Lockhart やその他のもの達によって誇張されているところの不運な事故に関する極めて僅かにしか文飾されていない記事を出している。それによると：—

> 彼の健康が増進の途上にあった1月早々に，バーンズはかの Glove Tavern (別名は Glove Inn) で愉快なパーティーに遅くまで居残っていた。帰宅に先立って，彼は不幸にも戸外に暫くの間，そのままで居たし，また彼が飲んでおいたアルコールの勢も加って，眠ってしまった。これらの環境で，また或る劇薬が彼の体質を変へてしまっていた特有な状態で，大変な (fatal) 冷気 (chill) が彼の骨に透ったのである。彼はその衰弱し切った体格をすでに我が物としているリューマチ熱の種をもって帰宅したのである。——

不幸にして，この逸話に対して，バーンズの幾通かの手紙は彼が正月の殆ど全部をその部屋に閉じ込められてしまったことを暗示している。かの Globe Inn はバーンズの家から1哩の4分の1以下の所にあったので，それは F. B. Snyder が説明するように，「彼があまりに向う見ずであったであろうので，彼の友人達は帰りがけに雪の中で眠ってしまったのであろうと認めたのであろうということは全くありそうもない。」Snyder は，それ故に，その逸話全部をフィクションであると烙印を押すことを勧告——すると，誰が彼と意見が一致しないだろうか——し，そしてそれ (逸話) は無視さるべきであると忠告する。問題の真相は，「禁酒運動 ("temperance" cause) と非常に不適当に名づけられたあのアルコール反対運動に対する熱狂的な支持者 Dr. Currie が，バーンズのダムフリース時代は一つの長い暴飲暴食の道楽で過されたという見解 (notion) や詩人が飲酒で身を死に追い込んだという見解やを微妙に促進するのであった。

この光景 (view) はヴィクトリア朝時代に於ける道義の高い表では受け入れられ得るものであったし，それ故に W. E. Henley の率直な酷評 (censure) となるまでに，すべて第十九世紀の伝記作者達によって，ぺらぺらと反響模倣されたのである。バーンズを親しく知る友人達や目撃者達やの証言があるにも拘らず，ヴィクトリア朝時代の慎重は単なる目撃による証言によって弱化されることは出来なかった。

このようにして，バーンズの行状や死去やについて，その理由とか原因とかについて，入り替り立ち替り，甲論乙駁が行われ，その止まるところなく，彼に関心をもつ人々を一喜一憂させて来たものであるが，遂に終に，その決定版とも言われ得るものが出現した。

1937年，酩酊者バーンズの伝説 (legend) は結局ついに，彼の時代に於ける最も卓越した医師達の一人 Sir James Crichton-Browne によって，すっぱぬかれる時が来たのである。その著 Burns from a New Point of View の中で，彼は「バーンズの死は偶然な (accidental) 事件ではなくしてそれに先行していた長い事件の継起による自然な結果 (consequence) であった。バーンズは心内膜炎 (endocarditis) で死んだのであって，これとアルコールとは関係がなかった。然し，アルコールの無思慮な (injudicious) 使用がその進行を早めたかも知れないということはあり得るのである。バーンズに於ける破滅の原因 (undoing) であったのはリューマチであった。それが若い頃

に彼を襲い，彼の心臓を害し，彼の生活を苦しく，そして，彼の生涯を短くさせてしまった。」と結論した。Dr. Currie を「バーンズについて，その時代以降に書いているすべての人々によるページを汚してしまっている」ところの「かの主役の中傷者」と呼ぶことで Sir James が十分に正しいとされたのは宜なるかなである。

その他の医者達によるバーンズの症状(symptom) について後に行われた調査は Sir James の発見事項を大いに確証している。特に Snyder は Toronto の Dr. Harry B. Anderson による文章を引用する：—

> この病症は心臓の併発症 (complication)，つまり「息切れ」，「衰弱」，「虚弱」，「速くて不規則な脈博」(心臓疾患による心耳の筋骨性振動) 〔auricular fibrillation〕，「末梢感染として発達した細菌学上の心内膜炎に恐らく帰するであろう精神錯乱のそれによる普通のものであった。

この稿も，いよいよその終末に近づいたので，我々は数多くある問題の中，一つだけを取り上げることにしよう。考えて見れば，我々にとって不思議なのは，Dr. Currie が自らもその詩歌を称讃していたバーンズについて，何故にそれほどまでに有力な誤伝を作成したかということであるので，この辺を少しく探ることにしよう。

バーンズの伝記を作成に当って，或いは発心し或いは予想され期待された面々には(1)バーンズの死去直後，その遺族に対する福祉のために大衆の感情を駆り立てようと熱心になったバーンズの友人 John Syme (1755—1831) や(2)バーンズの最後となった病気に附き添い，その若死には強い関心をもっていた Dr. William Maxwell (1760—1834) や(3)バーンズのエヂンバラに住む友人 Mr. Alexander Cunningham (—d. 1812) やであったが，資料の提供者という立場で，(4)バーンズに書翰を送った Mrs. Frances Anna Dunlop (1730—1815) や(5)バーンズからの書翰をもつ Mr. Robert Aiken (1739—1807) や (6) バーンズからの書翰をもつ Mrs. Agnes M' Lehose, Clarinda (1759—1841) や(7)自分も女流詩人であって，バーンズと親交があった Mrs. Mia Banks Woodley Riddell (1772—1808) や (8) Ellisland から宛てられた書翰をもつ Prof. Dugald Stewart や等であった。ところで，暫くの間，バーンズの伝記作成に当って，その作者撰定について，若干の不安があった。然し，最後に，1796年9月，その大任は Dr. Currie に委ねられることに決り，そして Syme によって集められた多量の資料が翌年2月に，Dr. Currie へ手渡された。然るに，その整理が全く附いておらず，大変な驚異感を刺戟してしまった。その才能を非常に尊重していた Syme はこんな風なのに，失望せざるを得なかったので，Dr. Currie は「私は彼 (バーンズ) の引出と机とから片附けたもの——私には，そう見えたのであるが——彼の小さい男の子が習字をしていたその手本に至るまで，全部を受け取っておいたのです」と言っている。〔だから，資料は整理されていて，こんなに混乱していてはならない筈であると，いうのであろう。〕Syme がこれより1ケ月前に，Mrs. M' Lehose に自分が仕事で疲れ切っているし，また1日に20通の書翰を認めねばならぬことが時折あると話したことが一部その混乱を説明するかも知れない。

Dr. Durrie はこれらの資料 (papers) を同情と悲哀と憐憫と称讃とを，また時々強いが然しその場だけな (transient) 嫌悪感をもって読んだと述べている。その嫌悪感 (disgust) は何であったか，その内容は何であったか。その一端は彼の言行によって暗示されているといえようか。Dr. Currie はバーンズの「内心の秘密」(heartsecrets) を自身に暴露させた後に，賢明な心のやさしい人について当然予想された通りのこととして，その問題 (subject) について語るのであった。「バーンズの生活と性格との卓越と同じように，それらの過失と欠点とは痛ましくまた悲しい所見 (observation) に余地 (scope) を与えるのである。問題に於けるこの部分は大きな愛情 (tenderness) をもって，触れられねばならない。もし彼の友人達がそれに触れなければ，彼の敵達が触れるであろう。私の心をあなたに向って自由に語らしめるならば，彼の不幸は主として彼の過失から起ったように見える。このことは言う必要がないことであり，また実に不適当なことである。然し，彼の伝記作者は詩人の非凡な魅力と憂愁な運命とがおの

づと憤慨させるスコットランドその他に対するそれらの激しい毒舌 (invectives) に陥らぬように身を守らねばならぬことを心に留めておかねばならない。Liverpool の詩人6名は我々の称讃する詩人の鎮魂歌 (requiem) を歌っているが，而も彼らの一人一人皆がバーンズの住んでいた地方と社会とに対するあの最も辛辣なそして或る程度まで不当な毒舌を楽み耽ってしまっている。」と彼は言った。その間，紆余曲折を辿りつつも，出版の計画・手配・着手・進行・と漸次進捗・ついに1800年5月，The Works of Robert Burns, with an Account of his Life, and a Criticism on his Writings, by James Currie, M. D. と銘を打って，躍り出たのである。全集4巻，2千部，各組1ポンド・11シリング・6ペンスであったことは当初に記述した通りである。大水，堰を切って溢れ落つ。その轟音は如何なる私語も飲み込んで，広く流れて行くのであった。

幼き頃のかわいいロビン (Robin) よ，若い詩匠のロバート (Robert) よ，Dr. Currie 他数名の語り綴った君の誤謬と過失とは，真偽のほどを知る私ではない。知っているのは君だけだ。また，それほどに知りたく思う私ではない。「恋心」(Love) と「詩心」(Poesie) と同時に生れたと言うあたり，つねに附物の女性に特別「もてた」(attractive) 君，名うての女性遍歴者 (notorious womanizer) であれば，誤謬過失による罪科はこれを多少まぬがれなかったことでもあろう。されば，ポープ (Alexander Pope : 1688—1744) が言う如く，「犯すは人，赦すは神」(To err is human, to forgive divine) であり，またゲーテ (Johann Goethe : 1749—1834) が加えて言うように，「過失と誤謬は人の常」(Die Fehler und Irritümer sind immer der Menschen.)。虚実・相混ずるのが人間か，虚実なきを望むこと，それは人間性の無視，虚実二相の在るところ，人間らしい味するか。神の赦と深とが，虚実で裁きの庭に立つ我らの追慕私淑する詩匠の上に豊かなれ！

偉大な詩匠バーンズよ，君が生れて，すでに二百と二十年。Alloway の小川は幼き頃の君を語り流れ，ダムフリースの君が愛した Nith 川は今尚君を讃え流れて，その音声は遠く久しく離れた此処——おお日本の私にまで聞えて来るようである。まこと，奇しき縁に結ばれて，二百回の誕生日に，君を讃え真心こめて，祝賀のメッセーヂを送り得たその私が来る二百と二十回のそれを待ちつつ，感動こめてこの一篇を捧げよう。

1978年9月——物深く思う初秋を迎えて
二日目の涼しく静かな書
斎にて——